

平成31年度 学校評価

1 学校関係者評価について

学校関係者評価委員会を令和2年3月2日（月）に予定していましたが、新型コロナウイルス感染症対策により、中止としました。

事前の資料配布により御意見を伺いましたが、特に課題点も出されず、学校評価のまとめについては賛同していただいたと捉えました。

2 自己評価について

重点目標の考察（成果と課題） ～教職員・児童・保護者の三者のアンケート結果より～

I 「豊かな人間関係」について

I 豊かな人間関係について

(1) あいさつについて

日頃の担任による道徳等の教科や学級活動の指導、児童会活動の取り組みの中で、また、PTAや地域の方々からの声掛けやご指導の成果として、定着度が増していると考えられる。ただ、設問4の「あいさつの指導をしていますか」では、教職員は指導していると思っているが、保護者の13%は、否定的評価をしている。また、設問1の「進んであいさつができていますか」では、肯定的評価の割合は、児童が9割を超えるのに対し、教職員は約8割、保護者は約6割という結果となり、児童や教職員と保護者では定着度の認識に違いが見られた。自主的なあいさつを定着させるためには、学校や家庭や地域が一体となって取組を継続させることが大切である。学校内での取り組みの継続した実践や、家庭や地域での大人から子どもへの声かけ等、指導の工夫について考え、これからも継続して実践していく。

(2) 思いやりのある学級づくりについて

いじめや不登校のない学級、一人一人の居場所がある学級づくりを目指し、全職員が共通理解のもとで取り組んでいる項目である。「思いやり」を問う4つの設問では、全てにおいて「そう思う」の最上位評価が1学期と比べて最大16%のアップになり、重点目標として取り組んできた成果が見られた。「思いやりのある子どもを育てる指導をしていますか」や「自己表現できる雰囲気づくりをしていますか」、「認め合い、褒め合う機会をつくっているか」の設問では、肯定的評価がほとんど9割前後から10割であったが、児童や保護者については、5%から多くは15%の否定的評価があった。

否定的な評価をしている児童や保護者もいることをしっかり受け止め、教職員と児童や保護者の認識の違いが少しでもなくなるよう、さらに教職員の意識を更に高め、日常的な指導とともに学級活動や道徳の時間における意図的な指導を行う。また、いじめに対しては、根絶を目指して全職員が徹底した指導や取り組みを行い、児童がお互いの良さを認め合い、思いや考えを素直に伝え合えるあたたかい学級や学校を目指していく。

II 確かな学力の育成について

II 確かな学力の育成について

(1) 「基礎・基本の学力の定着」について

「授業はわかりやすく楽しいですか（わかりやすく教えていると思うか）」の設問では、児童、教師ともに1学期比で最上位評価がプラスとなった。肯定的評価としては、どちらも95%を超えているが、最上位評価の「そう思う」の評価は、児童の78%に対し保護者は63%となり、3～5%の否定的評価もあった。

(2) 「豊かな言語表現」について

教職員への、「国語や各教科で言語活動の充実のための指導を工夫していますか」の設問15・16では、どちらも「している」の最上位評価が1学期に比べて大幅にアップし、1年間取り組んできた校内研究の成果が表れた結果となった。しかし、各教科での実践については、最下位評価はなくなったものの、「あまりしていない」の評価が8%あった。

「書くこと」については、「好きだと思いますか」の最上位評価が教職員は13%に対し児童は56%、肯定的評価は教職員の100%に対し、児童は86%で、「あまり思わない」、「思わない」の否定的評価が14%あった。

「話すこと」については、「進んで発表をしていると思うか」の設問において、教職員も児童も、1学期に比べて「そう思う」の最上位評価がアップしているが、「あまり思わない」もアップし、どちらも3割近くの否定的評価があった。

「聞くこと」については、「人の話をしっかり聞いていますか」の設問で、教職員も児童も1学期と比べて否定的評価は減少しているが、最上位評価の「そう思う」の回答は、児童の76%に対して教職員は27%となり、「あまり思わない」の否定的評価も13%あった。

「読むこと」については、「読書が好きだと思いますか（本をたくさん読みたいですか）」の設問で、教職員の「あまり思わない」の否定的評価が6%増えたものの、肯定的評価は教職員も児童も94%と高い数値となった。

「家庭学習」については、「家庭学習の指導を行っているか（声かけをしているか）（必ずしているか）」の設問において、教職員も保護者も1学期に比べて肯定的評価がアップし、特に教職員は最上位評価が15%アップして100%となり否定的評価がなくなった。児童の11%が否定的評価をしている。

「基礎・基本の学力の定着」については、校内研究や日常の学習指導の成果が表れ、「授業はわかりやすく楽しいですか」の設問において高い肯定的評価を得られたが否定的評価もあった。今後も日常の実践の中で工夫と努力を続け、学力向上のもととなる基礎・基本の学力の更なる定着を目指していく。

「豊かな言語表現」については、1年間、教職員が積極的に取り組んできた成果が見られた。

「書くこと」、「聞くこと」においては、最上位評価だけ見ると指導する側とされる側の認識の違いが表れた結果となったが、今後もあらゆる場面において継続指導を行い、意欲や態度を育てていきたい。また、「話すこと」については、まだまだ発表に対する不安感があると考えられるので、どの児童にも発言・発表の機会が与えられる場면을意図的に設定したり、発表・発言の仕方を工夫させたりして、児童が自信を持って表現できるようにしていく。

「読むこと」については、本校の特色としての読み聞かせや読書指導、読書活動の成果が表れた結果となった。今後も保護者や地域と連携をしながらさらなる活動の充実を図っていきたい。

「家庭学習」については、今後も学習の内容を工夫し、家庭生活に合わせた取り組み、また自主的な取り組みになるよう学校と家庭が連携しながら定着を図り、学力の向上を目指していく。

III 「健やかな心と体」について

III 健やかな心と体について

(1) 基本的な生活習慣について

「早寝・早起き・朝ご飯運動」の推進、取り組み、習慣化についての設問では、児童も保護者も9割近い最上位評価をしているが、教職員は、最下位評価がなくなり否定的評価は減少したものの「思う」の最上位評価が1学期と比べて11%のマイナスとなった。また、児童は8%、保護者は13%の否定的評価があった。

「食」についての「好き嫌いなく食べるように指導しているか(食べているか)」の設問では、教職員も児童も、「そう思う」の最上位評価が1学期に比べて1割程アップしているが、児童と保護者は、1学期同様に否定的評価が2割近くあった。

「無言清掃」についての「指導しているか(できているか)」の設問では、「そう思う」の最上位評価が1学期比で13%アップし、肯定的評価が94%であったのに対し、児童は「そう思う」の評価が4%マイナスで、肯定的評価もマイナス2%で83%となり、否定的評価も1学期比であまり変化はないが、教職員の6%に対し、児童は18%だった。

「基本的な生活習慣」については、どの設問についても肯定的評価が8割以上であり、1学期と比べてアップしたものも多いが、望ましい生活習慣が学力の定着はもちろん望ましい人間関係にも大きく関係することを考えると、どの設問によっても、また、教職員、児童、保護者のどの対象であっても、9割を超える評価を目指していく。

「早寝・早起き・朝ごはん」の設問では、児童は「している」と思っている学校生活や家庭生活の中で見ている教職員や保護者の評価はそれほど高くなく、認識の違いがあった。また、「好き嫌いなく食べているか」の設問では、教職員は指導している評価が100%であるが、児童と保護者の肯定的評価は8割程度であり、さらに「無言清掃」の設問についても、指導をする教職員は肯定的評価が94%なのに対し児童は83%と、指導と定着度の認識に差が見られた。

学校での教育や指導がさらに定着に結びつくよう、取り組みの継続や指導の工夫をするとともに、生活習慣に深く関わる家庭での教育力が高められるよう、家庭との連携を更に深めていく。

(2) 安全教育について

「安全な登下校」についての、「気をつけて登下校していると思いますか」の設問では、「あまり思わない」、「思わない」の否定的評価は保護者の1%のみで、教職員も児童もなかった。教職員の「そう思う」の最上位評価は20%アップして40%となり、保護者も54%であるのに対し、児童は94%という高い結果となった。

また、児童への「登下校のときに危ないと思ったことがありますか」の設問では、「ない」との否定的評価はわずか3%で、「ある」が85%、「ややある」が12%と、97%の児童が肯定的評価をしている。

(3) 防災教育について

「大規模災害時の役割分担を把握していますか(家族がどこに集まるか話し合っていますか、知っていますか)」の設問では、教職員も保護者も児童も1学期に比べて「そう思う」の最上位評価がアップしている。教職員は25%のアップであるが、「あまり思わない」の否定的評価も13%アップしている。否定的評価を見ると、保護者が15%中4%、児童が16%中6%の「思わない」の回答をしている。

「大規模災害時に地域で助け合う人間づくりができていますか(生活できると思いますか)」の設問では、1学期に比べて保護者も児童も肯定的評価がアップしているが、否定的評価を見ると、児童の5%に対し保護者は最下位評価4%を含めて22%の評価となった。

「安全な登下校をしていると思いますか」の設問について、三者とも肯定的評価はほぼ100%であったが、最上位の「そう思う」の評価は児童の94%に対し、教職員と保護者は約半分の評価であった。大人の目からみた安全と、児童からみた安全は当然意識の差が出るものであるが、安全に対する意識を高めるためには「危険」を教えることが必要であり、意識が低いためにおこる危険を起こさないために、学年に応じた安全指導を継続・徹底していく。

「大規模災害時の役割分担と連携した家族の動静、また助け合う人間づくりができていますか」の設問については、最上位評価がどれもアップしているとはいえ、53～75%の数値で、否定的評価が児童の「人間づくりができています」の設問以外は15～22%ほどあった。また、教職員の役割分担の認識については、13%の否定的評価があり、喫緊の課題として受け止め、改善を図る。いつ起こるかわからない大規模災害時の命を守るための対応については、事前にどれだけ準備をしているかが最も大切になるので、学校と家庭と地域の三者が連携した指導の中で、危機管理についての意識を高めていく必要がある。

IV 「開かれた学校づくり」について

IV 開かれた学校づくりについて

保護者や地域の方のボランティアによる読み聞かせの時間、また、学校だよりや学年だより等の保護者への通信、授業参観や学校開放日の開催、保護者や地域住民との連携についての設問において、いずれも100%に近い肯定的評価を得ることができた。これは、学校・家庭・地域が連携して子どもを育成しようという意識の中で、それぞれの取り組みが歯車となって子どもの教育を支えている成果が表れた結果である。来年度から導入されるコミュニティースクールにともない、これまでの基盤の上に工夫した取り組みを加え、本校の特色となる更なる開かれた学校づくりを目指していきたい。

V 次年度への取組

- 自主的なあいさつの更なる定着のための取り組み
- いじめのない思いやりのある学級づくりへの更なる取り組み
- 自信をもってできる豊かな言語表現のための取り組み
- 学校と家庭が連携した家庭学習や基本的な生活習慣の定着のための取り組み
- 無言清掃定着のための取り組み
- 危機管理意識の向上のための取り組み
- コミュニティースクールへの取り組み